

走りまわって遊びはじめましたが、ぼくだけはなおさらその日はへんに心がずんで、ひとりだけ教場にはいつていました。そとが明るいだけに教場の中は暗くなってぼくの心の中のようにじぶんの席にすわっていながら、ぼくの眼はときどきジムの卓テイクルの方に走りまわりました。ナイフでいろいろないたずらがきがほりつけてあって、手あかだまっ黒になつてゐるあのふたをあげると、その中に本やぎつきちようや石板といっしょになつて、あめのような木の色のえのぐ箱があるんだ。そしてその箱の中には小さいすみのような形をしたあいや洋紅のえのぐが……。ぼくは顔が赤くなつたような気がして、思わずそっぽをむいてしまふのです。けれどもすぐまたよこ眼でジムの卓の方を見ないではいられませんでした。胸のところがどきどきとして苦しいほどでした。じつとすわっていながら夢で鬼にでも追いかけられたときのように、気ばかりせかせかしてしまいました。

教場にはいるかねがかんかんと鳴りました。ぼくはおもわずぎよつとして立ちあがりました。生徒たちが大きな声でわらつたりどなつたりしながら、洗面所の方に手をあらいにでかけて行くのが窓から見えました。ぼくはきゆうに頭の中が氷のようにつめたくなるのを気味わるく思いながら、ふらふらとジムの卓のところについて、はんぶん夢のようにそのふたをあげてみました。そこにはぼくが考えていたとおり雑記帳やえんぴつ箱とまじつて見おぼえのあるえのぐ箱がしまつてありました。なんのためだかしらないがぼくはあつちこつちを見まわしてから、だれも見えていないと思うと、手早くその箱のふたをあけて、あいと洋紅との二色をとり上げるがはやいか、ポツポツケットの中心

におしこみました。そしていそいでいつも整理して先生をまつているところに走って行きました。

ぼくたちはわかい女の先生につれられて教場にはいりめいめいの席にすわりました。ぼくはジムがどんな顔をしているか見たくつてたまらなかつたけれども、どうしてもそつちの方をふりむくことができませんでした。でも、ぼくのしたことをだれも気のついたようすがないので、気味が変わるような、安心したような心持ちでいました。ぼくの大きなわかい女の先生のおっしゃることなんかは耳にはいりはいつてもなんのことだかちつともわかりませんでした。先生もときどきふしぎそうにぼくの方を見ているようでした。

ぼくはしかし先生の眼を見るのがその日にかぎつてなんだかいやでした。そんなふうで一時間がたちました。なんだかみんな耳こすりでもしているようだと思ひながら一時間がたちました。

教場をでるかねが鳴つたのでぼくはほつと安心してため息をつきました。けれども先生がいつてしまつと、ぼくはぼくの級で一ばん大きな、そしてよくできる生徒に、

「ちよつとこつちにおいで。」

とひじのところをつかまれていました。ぼくの胸は宿題をなまけたのに先生に名をさされたときのように、思わずどきんとふるえはじめました。けれどもぼくはできるだけ知らないふりをしていなければならぬと思つて、わざと平気な顔をしたつもりで、しかたなしに運動場のすみにつれて行かれました。